現生は願心の所与なり

本多弘之

一

願生心が胎生辺地の化土を超過して真実報土を見出すことは、未来を企図せる執心を批判して、純粋未来の招喚に触れることである。願生心が得生せる世界を常に突破して、新たなる真実の世界へ願生して行く。法蔵菩薩の本願は無限に我等の願生心を鼓舞する源泉として、根本本願から批判され突破されて行くべき化土を内に孕んで語られる。穢土を否定して浄土へ願生して行く教えは、三界に迷没する我等を摂して、勝過三界の涅槃の境地に導入せんが為である。無上妙果を成ぜしめんが為である。

しかるに我等凡愚は、己れが能をも顧みず無上妙果を絶対現在に獲得しうべきものと考え、獲得さるべき無上妙果の何たるかを議論する。超越として明らかにさるべき涅槃が、現在に内在すべきであると思考する。凡情を理性が統理し、理性的に主客の苦悩を克服しうると考える。凡心が六道を超え出ることはできないという、人間の絶対的な限定を、理性の傲りが忘れ果てる。欲生心の要請は、人間存在の根源から発起する存在自体の成就への悲願である。理性を迷わす論理ごときものによって少しも揺り動かされることのない存在の大地の要求である。自己の存在の意味を成就せんとする無尽の願いである。本能に比せらるべき至奥の要求である。純粋清浄、寂滅平等と表わされる涅槃界への要求は、流転の苦悩を脱却せんとする有情の根源的要求である。従ってその願心それ自体は無尽蔵に堀り下げていく力と倦むことなく凡情を否定して行く持続性をもっている。それが如何に神話の如く語られても、我等の宗教的要求に響き、我等の迷いを覚まし、我等をしてその真実を聞かしめずば止まない。

如来の因位果上の真実清浄の心は、我等にあっては「至心発願欲生」から「至心回向欲生」を経て「至心信楽欲生」に転入していくことによって、不実虚仮の三業

が明白に自覚され、我等に内備せる善根等を回して純粋未来を求むることの不可能なるを知らしめる。その地獄一定のところに、如来の真実が愈々明らかになる。そこに願生心が未来に為楽願生する心を批判して、現在一念に無限の与える世界を発見せんとする。無限の願心が欲生心を展開して、欲生我国を成就することにおいて衆生一切の志願を満足し、そこに無限なる光明界を成就しようとする。「衆生所願楽一切能満足」を願生心そのものの内面に与えようとする。願生心が外に満足を求めている間は、至心発願、至心回向の願の批判を受けねばならない。その限り衆生の求めるものは未来にあって、求めても得られない理想である。その未来は、衆生の過去現在を未だ根底から否定することなくして、その延長上に描かれた理想的未来である。雑毒の善、虚仮の行の範囲内における理想である。至誠心の徹底において自利真実が機の深信に徹到するとき、願生心は、その根拠が無能なる内懐虚仮の自己にあらざることを発見し、外への求めを転じて、願生心自身の内に無限の根拠と無限の力とを見出してくる。「一念一刹那も三業の所修皆是真実心中に作」したもうところの阿弥陀因位の菩薩行は、この無能なる自己に願生心を発起せしめることのほかに存在するものではない。この罪悪なる自己を摂してはたらく広大無辺際の菩薩行こそが、無量無辺なる真実心の現行である。全く無為無能なる凡愚に大涅槃を与えるためには、この願生心自身の展開によって、願生心が内に大涅槃を摂するまで自己を明らかにしていかねばならない。願生心が純一なる信心として、証大涅槃の真因とならねばならない。外に満足しうる世界を求めることを転じて、内に一切能満足の因を発見してこなければならない。願生心が、願生という無限の未来への志願でありつつ、その志願が無尽たるの根拠を内に堀り出さねばならない。そこにおいて始めて、貪瞋に覆われて煩悩の要求に似て起っている願生心が、真に不断煩悩得涅槃の真因となりうる。為楽願生を脱却して、煩悩林中に廻入する志願と感応しうる。願生が得生の世界を見出して、これを涅槃の真因とする確信に成るとき、願生は純粋未来への志願でありつつ、絶対現在に安住と満足とを開く力たりうる。

悲願が我等を摂して、我等の内に願生心を成就する。願生心は自身を生長せしめて、自身の内に無根の根を発見する。無能のところに無限の能力を開く因を見出してくる。我等にあっては自我の執心の現象たる厭離心に染汚された欣求心が、欣求心自身の内に純粋未来の呼びか

けを聞く。自利信心が自己を虚仮と批判せしむる原理に会うことによって、真の利他信海中の機の自覚に成りうる。愚痴の我等にはありうべくもない真実が、無疑の一心のところに与えられる。この不可思議なる事実が発起するところに、願生心の歴史が連続する。無限なる如来の無量寿なる生命が、この一念の時のところに成就する。それを『大経』には「願生彼国即得往生」という。

二

三界を超えたいと願う菩提心が、普共諸衆生の課題に相応して、自他共に成就して行く場を求める。それが願生彼国の心である。彼国とは宗教的要求によって開かれることを待つ世界である。我等の涅槃への思念を願生心として成就せんとする場所である。

「欲生我国」の悲願は、衆生に大慈悲心のはたらく場を与えんとするものである。欲生我国を展開するとは、その場を衆生の常没せる凡情から堀り起こすことである。しかもその場は、「彼の国」として、どこまでも衆生の流転の三界を超越せるところとしてその意味を全うする。「我が国」とは如来のみが言いうる言葉である。我が世界において絶対満足せる現在が成就しえている如来のみが、我が国に来れと叫びうるのである。願生彼国の心のところに真に「彼国」を発見しうるなら、そこに「我国へ来れ」と叫ぶ如来が生きておられる。願生心自身が、欲生心の展開を通して純粋無雑になりえたとき、願生は即ち得生の情を内面の深みに見出すのでなければならない。ただ理念的な理想郷でもなく、情緒的な夢想界でもなく、まして幻想された境界でもない。欣求心の切実なる要求が、強い欣慕心の内面に真の自己を批判する力と、自己を成就する原理とを発見して行くことによって、欣慕心の出てくる源泉に触れるとき、厭離をこととし、あるいは厭離を正当化して来た求道心の流転を超えることができる。真に我国と呼びかけられる場を見出すことにおいて、願生心が涅槃のはたらきを受けとることができる。孤独なる静寂の彼方としか思われなかった涅槃が大慈悲心のはたらきの源泉となって、愈々我等を呼んで止まない存在の故郷となる。未来の国と象徴された浄土は、実は願生心に与えられる一如真実の場なのである。従って真の願生心に関わらない「浄土」というようなものは無意味である。浄土はあくまで「願生浄土」として意味がある。願生心を離れたものは、観念か幻想でしかない。願生心を育て、また批判し、願生心の内に真に持続せる

如来の無限の智慧と力の根源を見出さしむるものこそが、「彼国」と呼ばずにおれない彼岸の意味である。願生心自身が見開く新たなる世界こそが、願生心に与えられる涅槃界でなければならない。

願生心が自己のはたらく場を、「彼国」に見出すところに願生心が退転することなき聞法の主体たりうる。我国と叫ぶ大悲心の世界へ念々に誕生しつつ、彼国として超越せる涅槃界を願生するところに、願生心の倦まざる生命力がある。純粋未来へ尽きることなく願生して行くことこそ、真の純粋未来の現前である。願生せしめるみなもとは、我国こそ真実なる存在の故郷であると叫ぶ欲生心にある。欲生を「如来諸有の群生を招喚したもうの勅命なり」(信巻)と言われる所以である。欲生心に接することにおいて、欣求心として現象する願生心が、厭離心を限りなく批判して、欣求心そのものを純化する。それによって願生心は「即得往生」の境界に安住するまで、即ち、「至心信楽欲生我国」にたまわる信心にまで帰入せしめられる。現生正定聚の信心とは、純粋未来のはたらく場がすでに現在にあるという確信である。欲生心がすでに純粋無雑なる信において、「我国」を開示しているということである。そこに願生心が大地の如き場を見出すのである。単なる未来に望まれた場でなく、超越せる国でありつつ、願生彼国のところに、すでに欲生我国のはたらきがある。願生心の中にすでに存在の故郷を発見している。願生心こそは、法蔵菩薩が五劫兆載の時に倦まざりし源泉である。願生心が真の場を有することによって、厭離心を超えて純粋なる欣求心、すなわち即得往生の信心に支えられることができる。得生者之情とは、願生心の中に勅命を発見せるの謂である。不惜身命の意味を与える勅命こそが、得生の情の現行である。欲生我国にふれた願生心こそが、「この現前の境遇に落在せ」しむる根源である。常没常流転の凡愚をして現実に落在して、一歩も退かざらしめるものが、願生心なのである。厭離心を起点として、それを越えて独立せるものが実は、真実の願生心なのである。自我の妄執に立つかぎり、永遠に「至心回向欲生」としてしか純粋未来を望みえない。回向心を自己の力として執する限り、厭離心を克服できない。その限りこの現前の境遇は苦悩の娑婆でありつつ、去るに由しなき迷執の場である。とても落在などしておれる場ではない。

「果遂のちかひに帰してこそ、おしへざれども自然に、真如の門に転入する」(大経和讃)とある如く、願生心の

内面に、果遂の願が見出されることにおいて、欲生心が「至心回向」の欲生に止まることを潔しとせず、胎生といわれる如き厭離心の描く世界を越えて、この現前の事実に帰らしめられる。現前の境遇に落在するというほど厳しい教えはない。妄執愚痴なる凡夫は、常に厭欣の間に流転しているからである。流転の群生に無上妙果を成ぜしめるものは、願生即得生のこの現前の信念を与えることによるしかないというのが、末代濁世の衆生を呼んで教説された『無量寿経』の教主釈尊の真意であろう。厭欣の幼なく拙なき宗教心をして、内に批判する原理を見出さしむるもの、それが五劫思惟の思案によって選び出された選択本願であろう。願生を勧めるものは釈尊である。欲生と叫ぶのは一切衆生救済の志願たる法蔵菩薩である。法蔵は釈尊の内から釈尊を呼ぶ人類救済の志願の名告りである。法蔵こそが、一切衆生の厭欣を縁として、欲生我国を内に展開し、至心信楽欲生の純一相続の信念を与える悲願なのである。厭欣に覆われ、煩悩に揺り動かされた我等の願生心は、帰去来の雷音に酔夢を醒まされて、内に欲生我国の勅命を発見する。勅命にふれるとき、願生はすでに厭離心を越えて、現前の苦境を安住一定の境と受取る独立自在の願生心に転ぜられていくのであろうと思われるのである。

「凡所施為趣求亦皆真実」（散善義・聖全・一・五三三）なる至誠心釈の文を、施為・趣求みな真実なる阿弥陀因位の願行と読まず、「施したもう所、趣求を為す」と読んだ『教行信証』の意図は、信心の体たる至誠心が如来の施すものとして我等の願生心になるとき、始めて如来も真実の施主たることができるという、親鸞の主体的な信心の自覚にある。施は如来にあり、趣求は自己にある。願生は我にある。天親菩薩が、「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」と表白され、また「我願皆往生」と言われる如く、願生の事実は「我」にある。しかしその願生が真実心たる所以は如来の所施にある。彼岸への願生が我国と呼ぶ如来の本国を内に見出してくる時、願生の主体は欲生我国たる法蔵菩薩なのである。「設我得仏」と名告る法蔵が、我等の願生心の内に「欲生我国」を創造する。そこに始めて、無疑無慮なる信が現在しうる。純粋なる願生心は、内なる勅命そのものの発表である。利己的な執心の描く世界を超過して、無仏の世界に願生する菩提心のはたらきに乗じて、「任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの」となるまではたらき続けるものこそが、如来の所施としての願生心でなければなるまい。

三

「願生彼国即得往生」とは、願が場所を持つことを楽い、その場所が願を充足することを意味する。「国土の名字よく仏事を為す」（『論註』）というが、宗教的要求を願生心として成就するということは、救済の悲願を場所を与えることにおいて全うするということである。真に仏事の為される場所を彼岸という。彼岸は願生の内容でありつつ、願生を発起せしめる根拠でもある。願心を呼びおこし、願心を生長し、そして願心を成就せしめるものが、彼岸の浄土のはたらきである。換言すれば、彼国とは願心が不動の確信に立ちえることの徴表を、国土として表わすものに相違ない。

願生心が、新たなる世界を「彼国」として発見せるに呼応して、内に欲生我国の勅命を初めて聴き取る。願生心の内に発見された勅命としての我が国は、あくまで果を因に廻した表現としての国土、涅槃界の自己表現としての国土であるから、願生心はどこまでも「彼の国」としてその国土の声に耳を傾けるのである。所施としての「我国」は、断じて所得としての「我国」に成らない。施されたものを我が物であるとする我情を破って、施されたものを彼の国のものであると聞いていく。所施（所与）が即ち所得とならないところに、凡心を摂せんとする教説の貴さがある。欲生我国を勅命として戴くところに、願生彼国が不退転の願作仏心たることを得る。所得は必ず所与である。しかし、所与は必ずしも所得とはならない。この間の不一致を単絡するところに仏道堕落の因がある。仏性未来とは、所得を未来とすることである。欲生我国はどこまでも願生心が自己の故郷を彼の国に求めんとする根源の力である。勝過三界道の大涅槃を安楽浄土として与えるということは、超時間的事実である。究竟如虚空広大無辺際なる涅槃界は、既に一切を摂し尽して場所と時間とを包越せるものである。けれども、悲しい哉、垢障覆える我等はこの所施を現在の事実として得ることができ難い。だからこそ、願生彼国と言わざるを得ないのである。穢土を浄土とすることが出来ないのである。そこに所施の具体的現実を、所得としては未来に表象せねば止まなかった浄土教の歴史の指標がある。しかし所得は未来なりとするも、所施まで未来にありとするならば、今現在十方の獅子吼は無意味となる。現在に大いなる願生心の現実があることを明らかにして行かねばならない。願生心の現実とは、先に述べたように、

あくなき厭離心の狂奔を徹底的に見抜いて、現前の所施の事実に落在すること是れである。

未来なる所得は、所施の大現実に内包されている。彼国とは、勅命たる我国が、過現未を分別する我等の上に写された影像である。その影に執する願生心を転じて、内なる欲生心そのものが、迷妄の我等の身心を転じて、如来の国土の風光を楽しませんとする。煩悩海中に漂没する凡夫をして、涅槃の寂静の安楽に遊ばしめんとする。尽未来際の所施たる現前の事実に欲生せよとの勅命を聞きえずに、徒らに描かれた未来の国を欣求している凡情に、願生心の内なる勅命を聞かしめることによって、現在に所得を成就せんとする意志的な願作仏心の不明を教え、現在に所施が斯願不満足誓不成正覚と叫んでいる事実の内に未来の所得は労せずして現在に開かれることを示しているのである。

「無上妙果不難成、真実信楽実難獲」（信巻）の宣言は、所与を所得と一致させんとする立場を否定し、所与を解明することに全力をそそぐべきことを告げている。我等は愚かにも、所得において少分に所与を感得しうると考える。しかるに所得を未来と決定せるときには、所与は現在に全分を顕示する。無上妙果はすでに純粋未来として、我等の願生心の大地となる。「能令速満足功徳大宝海」の現行が与えられているならば、純粋未来は我等がそれを可能とするか不可能とするかの問いさえも不要とする。ただ我等の仕事は現前の所与を真に獲得することである。

四

而して、『大無量寿経』は此の現前の真の所与を、「欲生我国」において、無上妙果たる一如の意味を開示する。煩悩の身心に感受されたる穢土を超過して、清浄意欲の境界としての浄土を以て、涅槃界の全分を与えんとする。しかれば、「願生彼国」の消極的意味は、穢土を越えんとする「厭離穢土」である。しかしその積極的意味は「即得往生」を発見することである。願生の所与としての彼国の内に欲生我国の叫びを聞くとき、「前念命終後念即生」して、彼国が我国の内容と転成する。「本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり」（『愚禿鈔』）とあるように、我等は常に一心帰命の前念に現在する。その一念の即時に後念が連続する。一念の前後でありつつ、しかし後念は現前の信念の純なる未来である。即得往生は願生彼国の一念の即時に連続する後念の内容であ

る。しかし我等は常に信の前念に立つ。後念に立つということはできない。前念に立てば、後念はその一念の裏面に連続する。前念命終が我等の願生心の立場である。彼の国は願生さるべき彼岸として生き続け、「我が国に生れんと欲え」との声となる。而して得生は常に前念の純粋未来たる後念にある。真の所得は一念の未来にある。しかも一念の未来は前念命終のところに全分を開示している。夢の如き遙かなる未来というのではなく、前念が終るところに即時に連続する未来として前念を積極的に意味づけている。その意味で純粋未来の所与はすでに前念に現在する。一念の前念に安んじて命終して行けるところに、すでに安住の大地の全分が与えられている。所得を現前せんとするのは、純粋未来のはたらきたる欲生我国の勅命を聞きえないものの焦燥である。大涅槃を未来に確信しえないものの居直りである。しかしまた一方、所与さえも未来であるとすることは、前念命終することを知らぬものの擬装である。謙虚の如く見えて、実は浄信を求めようとせぬ人智の自己欺瞞である。深い真実の懺悔は前念命終にある。小賢しい自己反省は却って懺悔を障害するものである。無慚無愧の身は、前念命終するしかない。前念命終はその一念の即時に即得往生を後念する。前念命終のないものに如何にして得生者之情がありえよう。前念命終するときに、すでにして「得生者之情」が後念即生して連続するのである。

ここに連続というのは、前念が後念に対する関係において、一念の内面における断絶をくぐっての接続を言うものである。前念は命終して、その初一念の終止点において、後念に連続する。しかも我等の初一念は常に前念に立つ。前念から前念に持続する。「念仏もうさんと思い立つこころ」が相続する。我等の散乱せる意識に即得往生が相続するのではない。我等は煩悩の穢身に純粋未来の招喚を聞思して、前念命終を相続する。一心帰命に憶念相続する。一念が一念に相続する。この一念の内なる命終から即生への連続は、我等の不純なる意識上の現在から未来への連続では断じてない。現在は絶対絶命の終りを念ずる。一念における前念は、そこに絶対満足の終止符をうつ。一念における後念はその終りを始めとして無尽の法界を開示してくる。絶対絶命の終結を、無限の始まりとする連続を「即得往生」という。我等は煩悩の身を以て、相続的に即得往生することはできない。絶対の断絶を経て、前念後念の終始を判明にして、連続的に「即得往生」するのであるというべきである。前念に

立つ我等にはどこまでも後念は終りの彼方である。終りを踏み越えようとするのは、終りを持ちたがらない我情の意欲である。此岸を終りとする宗教的決断のみが、彼岸を始めとして開きうる。所得とは無限の始めである。新しい生命の誕生である。それは、已にして与えられた所与の生命の真実の意味でなければならない。流転輪廻の生死という意味での新しい生命なのではない。その所得が純粋未来として存するというところに、願生心の発見する救済の成就がある。願生彼国に立つということは、常に前念に立つことである。後念に立つというは未来を見失ったものの謂である。後念は立つべき所ではない。後念は与えられてくる世界の背景にある。求むるは前念である。前念を求むれば、後念は自然に開示する。我等は地獄一定の身に死することを念ずる。彼の浄土に生れんことを願って、この穢身に死せんことを念ずる。そこに真の郷里に帰去来せよとの招喚の叫びが到達する。

五

所与は前念にある。而して所得は後念にある。後念に即得往生せしめるものは、前念命終の決定にある。一念の前後に所与が所得へと開眼する。しかし我等には苦悩の身心を以て全分の証悟を所得することはありえない。所与において浄光明満足なる世界は開示されるも、愚痴の身に感受される苦境は、十方仏国浄土なりとの楽天的体験を許容しない。浄土は彼国として願生心の内に未来への飛躍を通して現われてくるものである。願生心の内なる浄土を無限に内から純化するものこそが、願心そのものの選択としての法蔵の五劫思惟である。選択の願心は、我等の願心の内に欲生我国の叫びを聞かしめる。これによって我等は所得を現在とする必要を求めず、所与の全分を聞見することに安住せんとするのである。そこにおいて、願生が一念に前念命終して、念々に無碍に相続する。「願生彼国・即得往生」で願生心が一段落するのではない。願生彼国に死して即得往生に生きるのである。終りが始めとなる。そして始めが願生心を愈々相続せしめる。願生彼国と欲生我国の対応は、この前念と後念との連続によって内面的関係を判明にする。願生心の内に欲生心がはたらくことによって、願生心自身を自己批判して、純粋清浄なる意欲を発堀せしめる。願生心が、願を失って所得に腰を落着けてしまうことなく、あくまでも所得を未来としつつ、そして浄土を彼国としつつ、願生の即時に得生を感覚する。その得生は常に後念にあ

る。後念は前念にとって常に永遠なる未来である。常なる未来であって、一念の前後である。肉身が死骸となって与えられる未来ではない。現象的な生命の終熄の彼方なる未来は、必ずしも生ける願心の見出す未来ではない。「本願を信受するは前念命終なり」の金言を静かに頂いてみれば、我等の死は必ずしも真の死にあらざることが思われる。我等の思う死は、何らかの生の残臭をただよわせて、執心の灰を残し、頑迷なる自我主張の余煙をくすぶらせた死でしかない。大自然の巨木が寿を全うして倒れる如き死にはほど遠い。大自然の死は所与に死に切ることである。

生死一如なる大自然は、煩悩分別の衆生の帰るべき故郷でありつつ、意識の彼方なる永遠の未来界である。大自然に誕生しつつ、大自然をさすらい出でたる凡夫は、どのように大自然を恋慕するとも、それは一念の未来に存する理想としてしか影現しない。「柳は緑、花は紅」とは現前の分別の彼方なる大自然の事実である。我等は所与の大自然の事実を強情に拒否して、我執の描く未来に所得としての大自然を現前しようとして止まない。大自然界の生滅は、不生不滅なる大涅槃の寂静界の影である。我等は影をそのままに所得の事実として獲得せんとする。煩悩のスクリーンに映写されたものを実在と妄執する。願生心は、影を破って大自然界に直接せんとする悲願である。大自然の所与の事実を、煩悩に染汚された願心の彼方に理想化して欣求せんとする凡情を摂して、所与の事実に帰さしむるものである。

所得はあくまでも未来にあると決断しうるのは、所与の事実の内に、堕地獄の身が信知されるとともに曠劫の流転の闇が破られるからである。時を貫いて与えられたる存在の意味が、現前の事実に命終して悔いない確信を与えるからである。「慚愧荘厳」（十地品）の言説は、雑華荘厳の意を更に深めて、死して生きるところに与えられる存在の満足が如何なるものなるかを端的に示している。すでにして大自然に誕生したる我等は、所与の大事実に無限の付与を楽しむべき身である。にも拘らず愚拙なる我は、煩悩の対境としての苦悩の娑婆に、不平と不安を抱いて片時も安住しえない。大自然は遙かに永遠の未来に望見される理想にすぎない。「慚愧にて荘厳せよ」との教命は、この此岸に与えられたる煩悩の身心に死せよ、前念命終を決定せよとの発遣となる。そこに理想の未来は、一転して願心の必然的内包としての後念として純粋未来のはたらきとなる。所与の全分に開眼すること

はできないとしても、慚愧の心の所施として、すでに一切が願心に回施されてあることを信知せしめられる。全存在に表現している悲心を感知しえない愚かさは、無慚無愧の身の自覚によって、かろうじて前念命終の決断に到りうる。前念が自己の領分を判明にするなら、後念は前念の終りを始めとして、即時に連続している。「即生」とは一念の事実を示している。一念の内面に時の隔ては入りえない。前念と後念の間に間断があるならば、前念は次の前念に相続することはできない。前念が後念に無間に連続するが故に前念は前念に断えざる憶念相続となることができる。我等は所与に死するとき、即時に所得によみがえることができる。存在の満足は、不要なるものに死して、命の意味に生きるところにある。苦の生を楽の生に転換して満足せんとするは、所詮純粋未来を見出せないからである。為楽願生をこそ、我等は願生心の内なる固陋の病因と見定めねばならない。落在せしめざる病根は、厭離心にある。現在に安住することを許さざるものは、純粋未来を知らざるものである。純粋未来を一念のうちに後念しうるものは、この現前の境遇に落在して、無限の純粋なる未来へ一路、願生心に生き抜いて行くことができよう。そこに願心が前念命終の一念を相続して、現生正定聚の喜びを与えてくるのであると思う。